磐城公論

毎月(二回)十五日・三十日發行
福島縣石城郡平町研町十九
編輯兼發行人　山田政好
福島縣石城郡平町紺屋町十五
印刷所　加納活版所
福島縣石城郡平町研町十九
發行所　磐城公論社
電話四〇八番
廣告料　五號四字詰一行五十錢　場所指定十錢增
定價一部十錢　一年貳圓四十錢

闘爭の倫理化

永遠の平和は、人類の共通な、願誓である。がしかし、少くとも現世紀だけは此の共願を現實化する事は期待されない。

しかも、現下の地上には到る所、不斷の闘爭が、勇敢に行はれて居る。即ち

國と國との間に、民族と民族との間に、階級と階級との間に、主義と主義との間に、思想と思想との間に、團体と團体との間に、

更に極言すれば、對他國、民族、階級、主義、思想、團体間との闘爭が激烈に敢行されてゐるばかりではなく對內闘爭に、ウキ身をやつして草臥れぬいて居るの觀があるではないか!?

たとへば之を政黨に見る。

政友會內々輪闘爭、民政黨內同志の爭闘、無產黨內仲間の闘爭は、而も互殺的邪惡闘爭を、われらの前に、アキレ返る程繰返し、又繰り返し見せつけてゐるではないか!?

最近に至つては、神聖なる帝國議會內に暴行議員までが出現し、壯嚴なる立法府の權威を冒瀆して昭和聖代の不祥事を惹起した事件があつた事は、未だに吾れらの記憶に新らしい、生々しい事實だ。

× × ×

さはれ、主義、主張、政策を以つて公爭公闘する政治社會の政黨對政黨の闘爭に對しては、無條件にて賛意を表するものであるが、しかし目的のために手段を擇まず、恰も源、平、藤、橘の御家騷動の如き私爭私闘を日課とし利權爭奪を事務とするに至つては、政黨、政治、立憲政治の名に於て之を絶排すると共に、之れを彈擊せざるを得ない。

日本の政界のあらゆる闘爭なるものを深觀すれば、その多くは、國家民人を冒瀆し、最大多衆の利益と幸福を侵犯し、一政黨の黨勢擴張(無用有害の)に濫用せんがための徒黨朋黨的私爭私闘であると外人より斷せられても、われらは否!と返答する勇氣をもてないではないか!?

× × ×

夫れ斯くの如く、現下日本の政界に於ける諸有闘爭は、低級、愚劣、嘲笑すべく唾棄すべきもの、利權奪爭の邪惡に價し、終始する觀がある。

觀よ!!白下に曝露されたる大東京の一大疑獄事件の眞相を。市民代表的人物であらねばならぬ市會議員のテイタラクは、一体全体どうした事か!?更に日本最高級文化を誇稱する大東京市民の幾千萬有權者の代表者たりて而も神聖なる立法府に參する、われらの代權者であらねばならぬ代議士數名諸君の醜態は一体全体何たるテイタラクだ。

郷等の良心は僅少なる黃金の魔光に眩惑し、痲痺して、利權の爭奪に狂奔し、亂舞し、遂に日本の帝都—燦然たる文明と光輝ある文化史と、而して靑春者が思慕憧憬してやまぬ天下第一流の存在物ある靈感の都—を暗黑罪惡の魔都と化した。

郷等、鐵窓の下、萬斛の血涙を雨下して、二百萬市民諸君に謝罪し、二千萬有權者に懺悔するといへども到底その罪を贖ふ事は出來ない。若しも免れて恥なき呑舟の大魚—醜類の巨魁ありとすれば

帝の都を徹底淨化聖化のため秋霜烈日雷電霹靂的法權の發動を熱願してやまぬものである。

思想善導は、かゝる惡黨、魔團擊退打破により!

× × ×

「闘爭の倫理化」なる一論題を草せうとして、記者の筆路は、感情の激憤する所思はずも脫線して、こゝにいたつた。讀者これを諒せられよ。讀者も記者も等しく是れ日本人として、日本帝國を熱愛してやまぬもの。

帝の都をして聖純、淸淨、光明、靈感の大都たらしめたき熱焦的情感横溢してやまぬ、一念に至つては讀者も記者も共通の願誓であるが故に、記者の筆路の脫線を、感情の昂憤を許されよ。

サテ本論に歸る。

× × ×

闘爭激烈なる政界に闘爭が恒久不斷に繼續される事は當然すぎるほど當然である。

教育團体にも、社會公共團体にも、宗教團体にも、更に延いては慈善事業團体內にも、對外、對內の闘爭が行はれつゝある。

況んや、利害相反する資本家、勞働者間に慘憺たる勞資闘爭が敢行される事はこれ又やむを得ない次第である。

深觀すれば、廿世紀は「闘爭の時代」と斷言しても敢て過言ではあるまい

されど、不斷に行はるゝ所謂闘爭—理論闘爭、暴力闘爭、勞資闘爭、經濟闘爭、思想闘爭、政治闘爭、男女闘爭、國家闘爭、民族闘爭、團体闘爭、個人、私人闘爭、政黨闘爭等々々—の眞相を究明すれば、有用、有効、有害、有價値、有意義、有犧牲なるあり、又無用、無効、無害、無價値、無意義、無犧牲なものも多々ある。

科學的闘爭あり、哲學的、正義的、道德的、人間的、人道的、藝術的闘爭あり、非科學的、非哲學的、邪惡的、不道德的、非人間的、非人道的、非藝術的闘爭もある。

われらは、若しも闘爭せねばならぬ場合に直面したる時は前記後者を絶對排斥して、斷然、前者につく。

しかるに、現下、到る所に行はれる闘爭は、後者が過多にしかも勇敢に、放埒に行はれつゝあるかの疑惑を抱かざるを得ない確證があるではないか!?

世界歷史は語る。不心得千萬なる政治家が國家國民の名に於て、無用、有害、不必要の闘爭を所謂戰爭を、他國に向つて仕掛け、他民族に向つて挑戰し、莫大の國富を濫費し、多數の同胞を犧牲とした史的事實を過去の人類記錄は遺す。

獨逸の今はアメロンゲン幽閉の**カイゼル**こそはその最好の標本であらねばならぬ。幸にして日本帝國には、さる不心得なる政治家絶對皆無なるは實に結構至極な事である

團結論

闘爭なくんば向上發達進步はない。人類の歷史は、廣義的に云へば「闘爭の歷史」だ。是れは事實だ、そして眞理だ。赤博士マークス君を俟つて、はじめてより以來、幾萬年前の久遠より、人間存在と共に事實として、而も嚴たる、確たる、明たる千古の事實、萬古の眞理として未來永劫に亘つての事實であり又眞理なのだ。

ヒマラヤの絶峯、天際に聳立する限り、ナイヤガラ瀑布、百雷落下の瀑音を奏する限り、海と陸と相闘爭する限り、久遠に、永劫に「人類の歷史」は、闘爭の記錄—而も、涙多く、犧牲繁く、聖なる鮮血によつて彩られたる—記錄だ。

われらは、斯の人類の記錄たる歷史をして、神聖ならしめやう、そして永遠不滅ならしめやう。

而も、高く揭ぐる人類の旗印としての、歷史と記錄をして神聖ならしめ、永遠不滅ならしむる唯一絶對の聖途は理知の先見する理性より、良心の指導する道念より、意志の決定する道德的勇氣により—一言以つて云へば「闘爭の倫理化」によつてのみ、人類の記錄人間の歷史は燦然として、千古に光芒を引くものであると勇敢に斷言するものである。

本文讀者諸賢の見解や如何!?敢えて私見を開陳して諸賢の嚴正なる批判を仰ぐ。

(廿五日正午秋雨しめやかに楷前の漆葉にかゝるを凝視しつゝ認め終る。)

久
釜屋商店
電話九・一三九

暑中御伺
縣會議員(イロハ順)
若松美三
野崎滿藏
山崎吉平
鷺清昇
鈴木辰三郎

山崎合名會社
電話一〇・二七

放言三束

◉明治、大正新人の苦悶

◉眞夏の日中、半日許り、マルクス、ボーイ君と所謂理論鬪爭を試みた。

ボーイ君は、ボーイ君らしくマルキシズムを力說高潮してやまぬ。

明治、大正の新人である自分は聊か、理論鬪爭の談劇に於てタヂ〳〵と受太刀となつて來た時代と年齡の相違は、思想の相違懸隔であるといふ一事を痛切に感じた自分も、心を入れ換えて時代後れの化石的思想人、動脈硬化的封建家、天保錢的繰車押しとならぬ樣に、世界思想を研究し時代精神を吸入し、頭を常に新鮮に、氣分を常に清爽に、意氣を不斷に潑剌たらしめねばならぬワイと、深省內觀させられたサルニテモ、すさまじくもおぞましきものは、昭和新人―モダン、マルクスボーイ、マンドガールのもつ思想と傾向である

◉第三帝國と一元哲學

◉文明批評家馬場恒吾はいふ。

「思想と戰ふに銃劍を以てするこれが一番古るい。思想と戰ふに思想を以てする。これが中古るだ。思想に戰ふに、パンを以てせよ。これが最新式である」

味ふべく、又考ふべき言葉だ就中、われら昭和の舊人には！殊に就中、思想取締の官役の聖務にある仁に取りては!!

第一帝國は肉の世界、第二帝國は靈の世界、靈肉合流の世界こそは、人間理想の社會第三帝國である！」

と、文豪イブセンはいふ。

思想とパン、靈と肉、觀じ來れば唯物、唯志の兩極ではあるが、しかし、客觀を抱容する大主觀、主觀を合流する大客觀の一元主義哲學より達觀すれば

思想＝パン　肉＝肉　デアル

思想問題は生活問題

靈の問題は肉の問題

といふ一元的人生哲學に歸結するのだ。

哲學をもたざる政治家、思想を理解せざる官僚者流、以て奈何!?

◉金壹圓也の問題

◉金壹圓也を自分は所持すと假定する。

酒を飲むも可、洋食を喰ふも可、彼女に與ふるも更に可？ランプヤ君に捧ぐるは益々可？

又命のあらん限り是れを死守し、冥途の土產として、六道の手形代りに、現ナマにて所謂エンマ大王に手渡し、大王の直前に痛快なる啖呵を切つて、曰はく、

「大王よ！我輩はこゝに現金壹圓也を所持する。生前是れを死守するに如何ばかり苦勞した事か知れぬ。何となれば、金壹圓也は小金といへば小金なれど、我輩にあつては大金の大金だ。此の大金を銀行に預ける。心配でならぬ。人に托する又心配でならぬ。末法濁世の惡德經濟人共は他人樣の預金や委托物品をチョロマカス恐れあるからだ。

大王よ！先程、別れて來た浮世には、かゝる不心得千萬、不埒至極な、極惡非道な、會社銀行、組合を食ひものにする惡漢どもがウヨ〳〵して居る、こゝに持參する金壹圓也も、かゝる次第にて、冥途の土產として、大王に捧げんとはする。冀はくば大王よ！惡德經濟人擊討の十字軍を挙げて末法濁世の惡漢共を擊破されよ……」

と、讀者よ……斯くの如きは假定といはんよりは、忘想として嘲笑するに充分だ、が、しかし、若しも債券で五千圓當り、株で一萬圓もうけ、ハテサテ此の金を如何せう!?といふ樣な現實問題、實際問題に直面して苦勞する人絕對無しとは、斷言出來ま知れぬ。

管見……と……彈擊

◉日本帝國は、內外の國債合計金五十七億萬圓也の借務がある。國債の利子を最低四分利として、利子合計金貳億貳千八百萬圓也となる、是れを七千萬人同胞に割當てると一人當り金參圓二十五錢七厘一毛四朱……となる。

七千萬同胞は、七十の老翁も當才の赤子も、明けても暮れても、降つても照つても、一日金九厘也の國債利子拂ひをせねばならぬ。

何！壹錢に壹厘足らずの金九厘なんど屁のカッパだい！と齒切れのいゝ、江戸ッ子式の啖呵を切つても、貳億二千八百萬の利子と、五十七億萬圓也の元金との元利の大敵突如出現に及ばゞ「おらが大將」もかくいふ「おれ」も「お前」も、潮來出島の枯すゝきの樣にしほれてしまふではないか。

お互に每日金壹錢づゝ、銀行へイヤ郵便局へ貯金しませうそして金壹厘づゝ元金を返しませう。

◉新聞記者を打ちノメシて快哉を叫ぶY町の暴行紳士あり怪しからぬ紳士もあるものかな。泣言いつたり、わめいても仕方がないから

「汝の左の頰を打たれなば右の頰をも出して打れよ」

ナンて、クリストの垂訓を一蹴して、右の手に丸太棒を提げ、敢然起つて相手を一擊の下に打ちノメす事だ。

その筋の御厄介にならない樣に、われら文化業者たる記者諸君は、古武士の樣に文、武兩道に達人とならねばならぬマコトニ草臥れる事だがやむを得ない。

秋、將に戌辰だ。幕末劍劇の流行する秋だ。在平記者諸君！處女の如くカヨワく、詩人の如くシトヤカなる記者諸君！大いに武道練習に精進しませう。

◉コノ不景氣に、ヤレ何株、ソレ何株募集と前後左右、腹背敵ならで、カブ〳〵とブカブカドン〳〵と鳴物（配當、利益、羊頭、狗肉を以つて）入りで雜音おぞましくも、すさまじき猛威を振つて、中產階級以上の經濟鐵壁に襲來する。がしかし、誠に御結構なフレ込みでは御座いますが、○いものがありませんのでトント閉口仕つて居るらしいのが赤裸の眞相ではあるまいか!?

◉磐實の大和田大兄や、磐調の麥人文兄や、磐經の默鐘文友などが、數ならぬ綠雨を、無量居士なる文位を贈られ恐縮至極、有難千萬忝なし。もつべきものは文友だ。斯うして文友諸兄が私を宣傳して下さるので「益が來たのに」筆供養もせずに無量居士と納まつて、生きながらへて居られる。私は文友諸兄の厚情に泣く。と同時にかつて私を痛快に筆誅して下すつた仁―諸根勿來、金古政道、其他の仁に對しても感謝する。私は人を憎めない。又憎まれたくもない。舊盆だ。生れふるさとの舊盆だ。鄕土藝術舞踊家並に聲樂家は、精々唱ひ且つ舞ふべし。天心の明月は微笑して鄕土の空に懸る。私は明月を仰いで一切の恩仇を投擲して虛無の世界に生きる。

らかつた人達も幸福なれ！況んや私に好意を寄せ、愛情を捧げ、熱思ひをよせたる一切の古き人も、新らしい知人の上にも、冀はくば天帝よ、淸福と歡喜とを與へられよ。

愛國的血火言

日本に還れ（一）

銀座街頭、ペーブメントの上を濶步する、うら若き女性を發見した。

警見すれば、外人ソックリその儘。

サリながら尾行？する事半時にして、彼女は、自分と同じく矢張り、日本人であつた事を發見して驚いた。

ナゼ驚いたか!?

それは彼女が、とある町角のカフエーにて、これも矢張り一見外人マガヒの毛斷老孃と、日本語にて談笑し居るを警見したから。

自分は、鄕土に還元して滿五年、スッカリ田舍者になりきつた自分は、今春五年振りで上京し、此の街頭の一些事に對して深刻に考へさせられた。

おそらく讀者諸君に於ても、昨今の東都警見に於て驚異すべき、或は痛嘆すべき、又は讃美すべき、さま〴〵の事象に直面して、記者と等しく、否！以上に、しかも深刻に考へられて居る事だらう!!

それは、まことに結構な事に相違ない。何となれば現代日本人に最も必要な事は「自己內觀」「自我客觀」「自己省察」の一事であるが故に!!

聖人孔夫子は、自省三度して日々の言動を反省したそうであるが、われらの如き凡人俗物は日に百度も、千度も、自己を客觀し、內省し、深察して自己の「生活態度」「思想傾向」「感情氣分」「主義主張」等々、一言にして云へば「生き方」を深觀せねばならぬ筈だ。

「唯生くるにあらず、眞實に生くるなり」と哲人アリストートルは、吾れ人に垂敎された。全く以つて千古の哲語であらねばならぬ。

× × ×

さはれ現代日本人の「生き方」は、正しくして、善く、而も眞の生き方をなしつゝありや否や敢えて此の一事を嚴かに借問する。

記者をはじめとして、その環境の鄕土人、並びに敬親やまぬ「磐城公論」の讀者諸賢は、此の一事を深く考察せねばならぬ。

吾れ人ともに人間である。さらば獸としてゞはなく「人らしく生きねばならぬ」事は人間としての第一義的最先條件だ。

氷雪漠野上のエスキモーも、アフリカの黑人も、立憲政治の總本山たる英人も、最富國たる米人も、さては蒼浪ひたす三千年、富士と櫻の日本人も、騷擾國支那人も、勞農ロシヤ人も、「人らしく生く」の一事に至つては、古今東西、時、所位を論ぜず絕對的要件だ。

× × ×

しかるに往々にして、吾れらは「人らしく」生きんとしても生きられず、又は自らは好まずとも「人らしく」生きる事能はざる狀態―奴隷、人肉市場の女性、等々―に置かれた幾多の悲劇的生活者を、昔も今もそれを見るからには、われらは博大なる人類愛の聖念に点火して、崇高なる人道主義的理想を高潮して、リンカーンの如く、ガンヂーの如く、幕末志士の如く、一身を挺して決死的覺悟を以て奮起しなくてはならぬ。